

観  
察

ラオス この不思議な農業国

一般社団法人 北海道地域農業研究所 顧問 黒澤 不二男

昨年十一月に、ベストセラー作家として著名な村上春樹が、紀行文集として『ラオスにいったい何があるというんですか』を刊行しました。

この奇異に感ずる書名に惹かれて買い求めてページを繰ってみました。

ところがタイトルにあるラオス記述分は二四六ページ中の二二ページで九パーセントに過ぎませんでした。

さすが当代一流の文筆家、タイトル付けは絶妙、しかしラオスに本当に関心がある読者にとって「羊頭狗肉」の感が否めません。

ラオスの頂の元来のタイトルは「大いなるメコン川の畔で〜ルアン普拉バン〜」でした。このタイトルでは普通の読者は手

にとつてみる気は起こらなかったかもしれませんが。私は見事に釣られた一匹の魚だったんですね。

しかし、小文でしたがラオスという国の特質を見事に描きだしており、その点では不満はありませんでした。

ちなみに一月ほど前の北海道新聞の近刊書紹介で『ラオス全土の旅』という本が紹介されており、そのキャッチコピーに、イギリス国民へのアンケートの中で、世界で一番行ってみたい国のトップはラオスだったという記述がありました。

私たちの周囲でも、アジア諸国を訪れた方々は、隣国の韓国、台湾、中国、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピンなどなど多数おられると思いますが、ラオスを訪れたことのある人は少なく、隣国のタイとは対照的です。

私も知人から誘いを受けて今回訪れるまではほとんど意識することはありませんでした。ラオスと聴いて反射的に思い浮かべたのは大河メコンと「パテトラオ」（独立戦争時の共産系ゲリラ）という言葉だけで、汗顔ものでした。

このたび知人から、ある国際協力プロジェクトの関連でラオスに行ってみませんかという誘いがあり、物見高さもあって喜んで同意、この一月中旬に乾期のラオスを訪れることができました。

なお、プロジェクトは現在も進行中であり、全容については機会を改めて紹介することにして、本稿ではラオスという馴染みの薄い国のプロフィールを紹介してみたいと思います。

## ラオスのあらまし

通称ラオスは、正式には「ラオス人民民主共和国」。東南アジアのインドシナ半島に位置する共和制国家で、人口六三二万人、半島唯一の内陸国で面積は日本の約六三%、国土の約七〇%が高原や山岳地帯です。

北は中国、東はベトナム、南はカンボジア、タイ、西はミャンマーと国境を接しています。首都は、今回わたしたちが訪れたヴィエンチャンです。

## ラオスの歴史と国家体制

ラオスの歴史を、一八世紀以降から概観してみますと、当時は三つの王国に分裂、それぞれタイやカンボジアの影響下に置かれていました。

一九世紀半ばにフランス人がインドシナ半島に進出し始めた頃、ラオスの三国はタイの支配下にありましたが、ラオスの王族はフランスの力を借りて隣国に対抗しようとし、フランスの保護国となり仏領インドシナ連邦に編入されました。

第二次世界大戦中は日本が進出、その協力で独立宣言したものの、大戦終結後フランスが再び仏領インドシナ連邦を復活させようとしたことで戦乱が勃発。結局、一九五三年に独立したのですが、その後支配権をめぐる、右派、中立派、左派（パテート・ラーオ）によるラオス内戦が長期にわたりました。一九七三年、アメリカがベトナムから撤退、一九七四年三派連合によるラオス民族連合政府が成立。一九七五年南ベトナムのサイゴンが陥落すると、連合政府が王政の廃止を宣言、現在の「ラオス人民民主共和国」が誕生、一九九一年には憲法を制定。

以来、ラオス人民革命党の一方独裁体制が維持されており、一九九七年には、東南アジア諸国連合（ASEAN）に加盟し

近代国家の仲間入りを果たしました。

敬虔な仏教国でありながら、社会主義国型の一党独裁制（一党制）が敷かれており、この両者が矛盾なく並立しているのが、わたしたちにはちょっと奇異に感じられるところです。

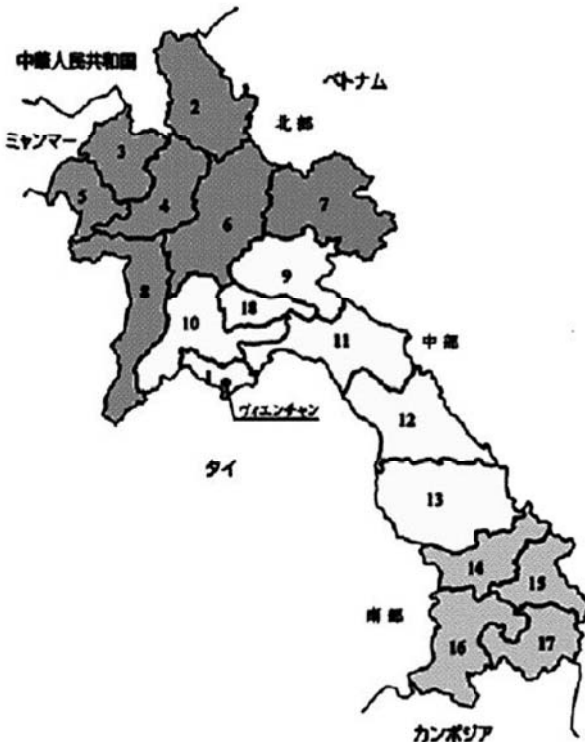
## 行政地域区分

ラオスの首都はヴィエンチャンで、主要都市にルアンパバーン、サワンナケート、パークセー（バクセー）などがあります。行政区分（地方）は首都のヴィエンチャン市を含む広域ヴィエンチャン行政区と一七の県から構成されており、県には郡、さらに村があります。

地方には議会がなく、県知事は国家主席が、郡長は首相が、それぞれを任命するという中央集権的行政制度をとっているそうです。

## ラオスの国土・気候とメコン川

ラオスは、海と接しない内陸国で、国土の多くは山岳部、国土面積の六一％は森林ですが、この森林地帯でも多くの人々が生活しています。



	県名	県庁所在地
1	ヴィエンチャン特別市	
2	ボンサリー	ボンサリー
3	ルアンナムター	ルアンナムター
4	ウドムサイ	サイ
5	ボケオ	フエイサイ
6	ルアンパバーン	ルアンパバーン
7	ファパン	サムヌア
8	サイニャブリー	サイニャブリー
9	シェンクアン	ベーク
10	ヴィエンチャン	ビエンカム
11	ポリカムサイ	バクサン
12	カムアン	タケーク
13	サバナケート	カンタブリー
14	サラワン	サラワン
15	セコーン	ラナム (セコーン)
16	チャンバサク	バクセー
17	アッタプー	サマッキーサイ(アッタプー)
18	サイソンブーン特別区	サイソンブーン

インドシナ半島を流れるメコン川は、チベット高原の源流から南シナに注ぐ総延長四、三五〇kmの国際河川で、ラオスを貫いて流れており、ミャンマーとタイとの国境を画しています。隣国タイとの国境線の三分の二はメコン川です。

また、国境として隔てるだけでなく、人や物が行き来する水運にも利用されています。

メコン川は、雨季に洪水となる後背地・氾濫原の底土からの栄養塩類を受けられることから、藻類やプランクトンなどが多く、草食性・プランクトン食性の魚類が豊富に生息、漁場として重要な役割をになっています。ヴィエンチャン市内のマーケットでも多様な魚類が店頭を賑わしていました。メコン川の乾季と雨季の水位の差は、ヴィエンチャンで一〇mを超え、乾季のおわりの四月ごろには、小さな支流では水がほとんどなくなってしまう、メコン川本流でも驚くほど水位が下がります。それが五月の雨季とともに水量が



乾期・渇水期のメコン川



農村部の支流・低湿地

増し、八〜九月には自然堤防を越えるほどの水量で、低地を水で覆うほどになるそうです。ラオスの気候はモンスーンの影響で明瞭な雨季と乾期に分かれ、大まかに言って五月から十一月にかけては雨季、乾期が十二月から翌春の四月まで続きますが、わたしたちが訪れた一月下旬は乾期で、もっとも過ごしやすいシーズンだとのことでした。

## ラオスの産業と経済

基幹産業はもちろん農業ですが、東南アジアの最貧国という経済から脱却するために、社会主義経済から資本主義経済体制への転換に遅ればせながら取り組んでいます。

近年では、観光のほか、国土の約半分を占める森林から得られる木材、ナムグム・ダムを始めとする水力発電によって隣国タイへの売電や対外援助などが主な外貨源となっています。なお基幹通貨はキープですが、隣国タイの通貨バーツが自国通貨なみに使用されています。

外国企業の投資促進のため、国内に一〇個所の「経済特別区」が設けられ、中国やタイなどの賃金水準の上昇に伴って安い労働力を求める外国企業の注目を集めており、海外からの援助・投資により、七〇％の経済成長を表現しているようです。

とりわけ、隣の大国である中国からは、官民挙げて企業や労働者がラオスに流入。ビエンチャンに中国系の店舗が集まるショッピングモール、中国が建設した公園が完成していたり、ダム工事などこれまで主に日本が行ってきたインフラ整備関連事業にも進出が目立っています。経済発展と密接な関連をもつロジステックスに関しては、国内に鉄道がなく、基幹道路の整

備が遅れていることなどが大きな隘路となっています。

原料の輸入や製品の輸出にはコストがかかり、安価な労働力を生かして工場を誘致するという東南アジア流の手法も難しく、近代的な設備を備えた大きな工場としては、ビールや清涼飲料水などを生産する国営のメーカー「ビア・ラオ」が目立つ程度。米を原料とする焼酎ラオ・ラーオも、生産は家内制手工業レベル、伝統工芸品として織物も多くは農家の女性たちの副業として手作業により作られているようです。そのためか、わたしたちが訪れた市場に並ぶ工業製品の大半はタイ製か中国製でした。

## ラオスの農業

国民がまんべんなく分散して暮らすラオスでは、労働人口の約八割が農業に従事、稲作を基盤とする農業を営んでいます。まず、自給米を確保し余剰分を販売、その現金収入で日用品を購入するというのが農村部の基本パターンとなっています。主食はもち米で、自給農業を基盤とした分散型社会と位置づけられるでしょう。

GDPは低いのですが、恵まれた気候、水利から食料は豊富で、飢餓に陥ったり、物乞いが増えるといった状況にはありませんので、「貧しい国の豊かさ」といわれるゆえんとなっています。

ます。

市内中心部のモーターバイクの大群も驚異的でしたが、いまだたくラクシオンを鳴らしたり、怒鳴り合うというような光景には遭わなかったし、わたしたちの接したラオスの人々の性格は温和で、皆ゆったりとした日々を送っているように感じました。

気のせいかなや猫、農村部での牛、水牛、家禽類までノンビリ、マッターリと飼われていて、我が日本の同類からみればうらやましい限りだと強く印象に残りました。

稲作、野菜、果実類以外では、現金収入を得やすいパラゴムノキの栽培をする地域が現れたり、高原地帯では良質なコーヒーの栽培が行われ、ラオス最大の輸出農作物となっています。また、近年まで農薬や肥料の使用がされてこなかったことから、無農薬栽培の作物を育てて輸出する動きも一部にはできています。

## ラオスの稲作の特色

ラオスのコメは、栽培システムからおおまかに、(1)天水稲作、(2)灌漑水稲作、(3)陸稲作の三つに分けられています。その定義は表のとおりとなっています。

最近のラオスのコメの収穫面積は八五〇九五万ha、粗生産量は三一〇〇三四〇万トンで、雨期天水稲作が全収穫面積の約七〇%を占め、生産量では、雨期天水稲作が約七六%、乾期灌漑水稲が一七%、陸稲が七%という構成となっているということです。

ラオスのコメはモチとウルチが生産されており、ラオス国民の主食はモチであるため国内で生産されている八〇〇八五%のコメがモチとなっています。一方、少数民族のモンとヤオ族、都市圏の一部住民と外国人が主としてウルチを食しているとのこと。

灌漑水稲作では年二回、雨期と乾期に作付けします。水源と灌漑施設が整備されている地域では、灌漑水利組合によって、個別の圃場へ導水し湛水しているようです。雨期は天水稲作とほぼ同じ作業暦で、乾期作は雨期の収穫直後から十二月にかけて育苗し、一月に移植し、乾期の終わりから雨

ラオスの稲作の栽培システムによる定義

栽培システム	定義
天水稲作	畦で区切られた圃場で稲が栽培され、圃場は栽培期間中に降雨を利用し湛水状態になる。
灌漑水稲作	畦で区切られた圃場で稲が栽培され、圃場は栽培期間中に灌漑用水を利用して湛水状態になる。
陸稲作	圃場は畦がなく、降雨を利用するが湛水できない。稲は主に斜面上で栽培され焼畑が主流である。



標準的な機械装備



本田一部利用の育苗



ジャンボタニシの卵塊 (被害大)



家族主体の田植え風景

期の始まりの 四〜五月に収穫となるのです。  
今回、わたしたちが訪れたのは、首都ヴィエン  
チャンから約三〇kmの純農村地域で、かつて日本  
の経済援助で基盤整備(約三、〇〇〇ha)された  
稲作地域です。

灌漑施設等は老朽化、ほ場区画も当初区画から  
小区画に細分化され、一戸当たりでは平均一・〇  
ha程度の零細な稲作を営んでいます。灌漑用水は  
メコンの支流からポンプアップされたものを利用  
しています。

土地制度は、ラオスというか社会主義国家によ  
くみられるように、土地は国有で、利用権を分与  
された地主(公務員が多いそうですが)から、耕  
作農民が借地利用するシステムをとっています。

種籾は主に、モチの改良種PNGやTDKとい  
う品種が主体で、購入または自家採種。

ウルチはタイ等の基幹品種のジャスミンライス  
だそうです。

本田の一画の五〜一〇%の面積で三〇日苗を育  
苗、移植の二〜四週間前にプラウ耕で荒起こし、  
通水後さらに砕土・代掻きをします。これを、①



市場にならぶモチ米



訪れたある農家の家族



稲作農家バサートさん

耕耘機・②水牛と鋤・③賃耕という三パターンのどれかで耕作します。この地域では①と③が主体となっています。③が主体となってきたのは、個別農家でも五〜八・五馬力の耕耘機をローンで購入できるようになってきたからだと言いました。

移植は機械移植がまだ少数で、手植えが主体で、化成肥料と尿素などを組み合わせてhaあたり全窒素で六〇〜八〇kg程度施用していますが、防除では農薬等の薬剤はあまり使っていないということです。除草は人力による除草作業、収穫は鎌を使って

の手刈りが主体。①親類縁者による自家完結、あるいは②村落内で労働力を提供しあって共同で収穫、もうひとつは③雇用労働主体の三パターンで、家族構成や集落内の人間関係等の状況によって決まり、仕事量はおおむねhaあたり三〇〜三五人程度だそうです。

収穫したらそのまま圃場に置き天日乾燥し、脱穀は動力脱穀機の自家利用が主体で、粃の状態を高床式の小屋に貯蔵する場が多そうです。

自家消費分を除き、余剰米は販売するが、商業的精米業者に直接もみを持ち込むか、





市街地にある精米業者の豪邸



精米業者の工場

精米業者の代理である集荷業者が農家の粃を集荷するシステムが主流で、精米料として碎米、米糠は業者取り分に。玄米価格は変動しますが、モチで市場最終販売価格の四〇〜五〇％が農家手取り価格の水準となっており、稲作農家経済を補うため、野菜等の現金作物の栽培や、若年家族員の市



副業で行う雑貨店舗

街部への通勤兼業、主婦などは農園に小売り店舗を出すなどの副業も盛んなようです。

基本である稲作の精米業者対農家間の収益配分率の適正化が大きな課題となっていることから、これに影響するファクターとして精米歩留まり（品種、貯蔵水分、精米機能力等による）が挙げられますが、これに関わって我が国の技術協力や支援の方向等も検討課題となっています。

## 暮らしのあれこれ

ヴィエンチャン市街では、公共交通機関網（電車、地下鉄など）がないことから、もっぱらバス、自動車、モーターバイクが利用されており、通勤、通学はバイク頼りで、そのピーク時は壮観で、バイク車体を改造した五、六人の乗り合いタクシー（TUKU-TUKU）も重要な交通手段となっています。中国資本や韓国資本のショッピングモールも出店しているようですが、食料や衣類、日用品の買物物は大型の市場が開設されており、山の人で活況を呈しており、そのエネルギーには圧倒されました。路傍での売店、飲食店のたぐいも多く、暮らし易さ、物価水準はわたしたちの眼からみても十分満足できる水準だと感じました。



ホテル前の露天居酒屋の活況



市場の新鮮・豊富な青果物

ただし、工業製品等はほとんど輸入品、高額な買い物等は隣国タイでというケースが多いとのことでした。

乾期というせいもあって、気温は二五℃〜三〇℃で比較的過ごし易く、市街には色とりどりの花が咲き乱れ、快適な滞在を楽しむことができました。ちなみにホテルは一泊日本円三、〇〇〇円程度の中級クラスでした。

食事はメコン川を眺望できるレストランで朝食、夕食はホテル前道路にほぼ常設されている露天飲食店で、ラオスビールを傾けながら豊富な食材でのラオス料理（モチ米の

おこわ、米粉の麺類、メコンでとれたテラピアやナマス類の唐揚げ、多種のフルーツ、パクチーなどちょっと癖のある香草などのトッピング）を楽しむことができました。

ラオス料理の特徴は辛いものはより辛く、甘いものはこってりと甘いので、日本人には苦手な方もいるかもしれません。

## むすび

短期間でヴィエンチャン近郊の農村をかけ歩いてきましたが、社会経済や農業の発展段階からすると、ラオスは、いわゆる後発・発展途上国に位置づけられますが、我が国と対比してみると、そこに暮らす人々の満足度、充足感は決して低くはなく、時間はメコンのようにゆったりと流れているように感じました。また今後の伸びしろというか可能性は豊かで、何とも不思議な魅力を秘めている国で再度訪れたいという気持ちを起こさせるところでした。メコン川のように、源流部では荒々しく、中流部ではゆったりと、下流部では茫洋と広がる様相のようなふところの広さに打たれました。

また、本稿では、わたしたちのプロジェクトの詳細を紹介することはできませんでしたが、機会があれば紹介をさせていただきます。と思います。

〈了〉